マンスリートピックス

1. 常に経済社会の動きに目を向けて
2. 北国の冬は8月から始まる
3. 企画委員会に期待したい

1. 先頃，経済企画庁から発表された国民生活白書が，この種白書類の発表にあたって先例を見ない閣議了解を得られないという事態になり，新聞紙上を振わしたことは記憶に新しい所であろう。この白書に取り上げられた主題が国民生活の優先であったが，これは誠に時宜を得たものであったと考える。わが国の他の欧米諸国に類例をみない戦後の経済成長が，一般国民の犠牲，例えば都市公害であり交通地獄であり住宅問題等であるが，この上に立って行なわれたという批判が年前から欧米諸国にあることは，やっかみ半分とはいえ，一面の真理をとらえているといえよう。このように考えてみると，今後のわが国の経済・社会の進むべき途が自ずと明確化してくる。すなわち，国民生活と密接な関連を持つ公共投資が一層行なわれることとなり，土木技術者はますます繁忙をきわめるとともに，実際仕事をするにあたっては，地域社会との摩擦をでき得る限り避けることが要請されるようになるといったことが予想され，土木技術者の当面する課題も技術の範囲を越えるような事柄に悩まされることも考えられる。要するに技術者も常に社会の動きに目を向けることが必要であろう。 [C]

2. 人々が炎天下にうめいている8月 31 日，北国に住む公務員には石炭手当が与えられる。独身者の中には夏のうちに汗をふきふきそれを体内で燃やすものもあるが，一家の主人ともなるとさっそく一冬の燃料を買いためねばならない。終戦後数年ころまでは燃料といえば石炭か薪で，それを馬車に積んでガラガラと車をきしませながら各戸に配っていた。道路の舗装はわずかで，コンクリート舗装であった。自動車交通も少なく，交差点などでも小供たちは「追いかけっこ」をしたり「かんけり」などをして遊びたわむれていてもだれもとがめるものはいなかった。このようなわけで，雪が降って交通が途絶するようなことがあっても，人々はそれを宿命と思い家の中に閉じこもって自然に路がつくのを待っていたのである。しかし，今日では，札幌市でも 1 シーズン 2 億円にも及ぶ除雪費を計上し，雪が降り積もると未明のうちから，あちこちの街路では除雪車が勇ましく走り回っている。最近ではその雪と氷を積極的に利用して雪まつりなどを開き，1972 年には冬期オリンピックを開催しようとしている。大倉山オリンピック シャンツェは南夏した真夏の太陽を受けて目下建設中である。 [S]

3. 土木学会のあり方については常に議論があるようだ。学会誌の先月号でも，企画委員会の設立と活動について仁杉委員長が書かれており，土木学会もどうやら重い腰をあげたようである。先月号には通常総会報告も載っているが，事業報告をみても，事業計画をみても，部外者にはどうもよくわからないのが，いくつかの委員会の活動内容である。どの委員会も口占を合わせたように，「××に関する調査研究を行なうほか，××講演会を開催し，××協会に協力する」ことを事業計画にしているようだが，調査研究とは何なのだろうか。数十名の委員および幹事が一年に数回の委員会に集まって，どんな調査研究をしているのだろうか。講演会開催の準備や各種協会との連絡協力のために，大人数の委員会が必要なのだろうか。調査研究の結果はどんな形で一般会員に還元されているのだろうか。科学技術が日進月歩の今日，調査研究はたしかに重要であろう。しかしながら，企画委員会の基本方針の中に，「土木学会は調査研究にあたって，各セクトのバランス等にこだわることなく，実際にことにあたっている者を中心にして，機動性をもった活動をすべきである」とあるのを読むと，現在の委員会活動は必ずしも満足なものではないようだ。企画委員会が土木学会活動の単なる調査研究の域にとどまらず，十分な成果を土木学会員に還元されんことを切に望みたい。 [J]